The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	倭寇物語の創造 ： 近代日本における海賊の発見とジョン・デイヴィス殺害事件（1605）
Author(s)	橋本, 順光
Citation	人文学林. 2024, 1, p. 143-164
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/95137
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

倭寇物語の創造

―近代日本における海賊の発見と ジョン・デイヴィス殺害事件（1605）―

橋　本　順　光

Invention of Japanese Buccaneer Narrative: Modern Japan's Appropriation of Piracy and the Murder of John Davis (1605)

HASHIMOTO Yorimitsu

Pirates challenge conventional notions of public versus private domains and moral dichotomies. The narrative of a pirate who opposed Alexander the Great in the 19th-century Japan revealed the navy–piracy relationship, thereby reshaping public perceptions of Japanese pirates as forerunners of imperialism. Unlike British Privateers, this type of piracy lacked official support and sparked discussions about its potential resurgence. The assassination of explorer John Davis by Japanese pirates in 1605, primarily documented in England, was used in Japanese imperial propaganda. Nevertheless, the account elucidating the transformation of pirates into a navy remains elusive. With the conclusion of the Second World War, this incident ultimately became obscured and forgotten.

キーワード：海洋文学，海賊，日英関係

はじめに

しばしば海賊は，公私と善悪の境界を問いかける存在として描かれてきた[1)]。海という無人の空間を領海や公海として区切る根拠は何なのか，略奪と通商はどのように違うのか，海軍と海賊は地続きではないのか，関税は制度化された海賊行為と変わらないのではないか，そんな問いを引き起こすゆえに，海賊は山賊に比べて両義的となり，時に独占や覇権を切り崩す先駆者

1）海賊（行為）に注目することで歴史観や世界観を見直す研究は多いが，ここでは海賊史観を展開した稲賀（2013）の序章を特筆しておきたい。

として美化されることになる。特に英国ではスペイン船を襲撃する私掠船が盛んだった歴史があるため，そんな恣意的な境界を越境するアウトローな英雄としてことさらに美化されてきた。

そうした海賊像を西欧に根付かせたのは，アウグスティヌスだった[2)]。彼は，それと記すことなしに，キケロの『国家について』にある逸話を『神の国』4巻4章で引用した。アレクサンドロス大王が海賊を捕まえた時のことだという。王は，海賊に何の権限で海を荒らすのかと尋問した。すると海賊は，アレクサンドロスこそ何の権限があって世界を荒らすのか，と聞き返した。船一艘だと海賊となり，船団だと王になる。規模が違うだけで，その実は変わらないのではないかと反論したのである[3)]。つまり，神の国に比べれば世俗の権力はいずれも起源は暴力にあり，正当性がないというわけである。この逸話はフランス革命後の十八世紀英国で好んで引用され，中でも哲学者のデヴィッド・ヒュームは，当時の英国を悩ませていたインドのマラータの海賊をあえて例に挙げ，原理上，彼らを盗賊と詰る根拠はないと示唆したのだった[4)]。

東アジアの倭寇もまた，こうした西欧の海賊像と無縁ではない。少なくとも明治以降，倭寇は「海」と「賊」の境界を問い直す存在であった。戦後，倭寇が多民族集団だったことを解き明かして研究を一新した田中健夫は，倭寇が「輝かしい日本人大陸発展史の一頁」として語られ，明治以降の西洋化と富国強兵のなかで評価されたことを指摘している[5)]。それゆえ倭寇は安易にノルマンの海賊と比定され，その研究は「国策推進」か「好事家の趣味」の域を出なかったというのである（田中1957, 70）。確かに朱印船貿易や南洋の日本人町も明治以降，実証的な研究が進んだが，例えば山田長政が南洋進出の先駆者として物語化されるなど，そこに「歴史の動員」があったことは否めない（後藤2022, 7）。ただ長政への注目がボルネオのホワイト・ラジャことブルック一族と切り離せないように[6)]，倭寇の再評価も英国との関係を無視できない。しかし，倭寇がどのように英国の海賊と比肩され，過去が「動員」されたのかはほとんど研究されていない。そこで本稿は，こうした倭寇再評価と英国との関係を概観し，海賊ないし倭寇像の再構築により秩序や境界が再編された好例としてジョン・デイヴィスに注目する。1605年，英国船タイガー号で水先案内人を務めていたデイヴィスに倭寇が襲いかかり，全滅した記録は英国側にしか残っていない。それゆえ，この事件は英国を通じて日本で発見されて以降，倭寇をめぐる一般書に登場する定番の逸話となり，時代と都合に合わせて語り直されたのである。

2）例えば，後述のアウグスティヌスの逸話から，テロリズムと帝国主義は区別できないと問いかけたチョムスキーの *Pirates and Emperors, Old and New*（2002）は未だ記憶に新しい。

3）ただし例えばZetzel（2017, 67）にもあるように，キケロの原文は散逸している。いわばアウグスティヌスの無断引用という海賊行為によりこの海賊の反論は広く流布したものの，その結果，キケロの功績は忘れられ，アウグスティヌスによる寓話として定着したことになる。このこと自体が，法の恣意性と実効性という逸話の主題をまさに問うものといえよう。

4）Lincoln（2016, 7–8）．海賊版と著作権をめぐる論争が起きたのも同時代のことであり，その際に同じアレクサンドロス大王と海賊の逸話が援用された点についてはJohns（2010, 36–38）を参照。

5）田中（1959, 259）．以降，引用は現代表記に統一し，差別的表現は歴史資料ゆえそのままとした。

6）逆にブルック一族は「西洋山田長政」とも言及された。詳しくは橋本（2014）を参照。

志賀重昂と海洋文化移入の困難

明治元年となる1868年，五箇条の御誓文に付随して明治天皇が国民に向けた御宸翰で，「万里の波濤を拓開し国威を四方に宣布」することが宣言された[7]。こうして1872年には英国海軍をモデルにして海軍が設立され，同様に海洋思想や海賊文学もまた日本へと移植されることとなった。スティーブンソンの『宝島』（1883）やヴェルヌの『海底二万マイル』（1870）などが翻訳ないし翻案され，それまで不安と恐怖の対象だった海が，立身出世を夢見る青少年にとって可能性と成長をもたらす舞台として描かれることになる。本来，日本は海の国であって，徳川時代の鎖国が例外的なのであり，明治になって古来の海国日本が復活したのだとは，明治時代によく見られた主張だった（橋本・鈴木 2017, 序章）。後述するように，海外雄飛や海国日本は帝国主義の美辞となり，東南アジアを中心にした当時でいう南洋の植民地化を主張する南進論では，望むべき未来や理想が好んで歴史を通じて語られることとなる。

そんな南進論の嚆矢とされる志賀重昂の『南洋時事』（1887）は，1886年に戦艦筑波のオーストラリア近海の巡行に同乗した時の経験に基づいている。ただ志賀は，南洋での見聞により，このまま世界は「優等人種」である「白皙人種ノ専有」となるという悲観的な見通しをもっており，それゆえに「黄色人種」で連合しつつ貿易で存在感を示す必要性を訴えている[8]。こうした人種競争の観点から，移民や領土拡大をとらえるのは19世紀後半から20世紀前半にかけての世界ではむしろ主流だった。それゆえヨーロッパ系住民が主流派の地域では，日系移民が警戒され排除されるという現実があり，同時期に志賀も協力していた殖民協会が移民先にメキシコやペルーに注目したのは，現地の人々が日本人と人種的に似通っていると考えられていたからにほかならない。そんな宣伝のために，アメリカの一部で流通していた東洋人メキシコ発見説なども援用されており，後に志賀重昂も『続山水図説』（1916）でその片棒を担ぐことになる。拍車をかけたのが1924年のアメリカでの移民法（通称排日移民法）で，以降，中南米なら人種的な同化は困難でないばかりか，中南米の帝国は日本の漂流民が設立したといった言説まで宣伝に使われたのだった（橋本2019）。こうした移民をめぐる人種闘争の世界観は，途絶した植民活動として倭寇を再評価へと連続し，その言説に伏流することになる。

このように東洋の移民や軍艦の寄港が現地で引き起こす懸念については，志賀は十分に承知していたと思しい。志賀がオーストラリアを訪れた1886年は，アメリカで排中移民法が通過して4年後のことであり，当地でいわゆる白豪主義が叫ばれていた頃のことである。そのためだろう，英語を能くした志賀は，積極的に新聞記者の取材に応じ，「日本帝国」の実情を紹介する

7）以降，竹越（1938, 192）を典型に，倭寇は「万里の波濤」を開拓したと強調された。天皇親政が復活したように，往時の日本には海洋帝国があり，それが復活したという物語が作られたわけである。

8）志賀（1887, 14–16）．この点についてはすでに矢野（1975, 58–59）に指摘がある。

講演を幾度も行い，相互の理解を訴えた[9]。むろん，それは逆効果でもあったろう。志賀が知っていたかどうかは不明ながら，彼の乗る筑波が8年前にオーストラリアに寄港した際には，新興の海洋帝国に対する警告の声があがっていた。例えばシドニーの無名記者は，「日本にすでにこれほど強力な海軍の力があるのだとすれば，100年後にはどうなるのだろうか？　今や日本はアジアの英国そのものだ」と，日本の勢力が南下する未来に懸念を露わにした[10]。この筑波は，英国の戦艦HMSマラッカを買い取って改修したものであり，ちょうどそんな英国の軍艦を逆手にとるようにしてオーストラリアに寄港し，島国から海洋帝国への変化を見せつけた日本は，確かに「アジアの英国」そのものだったといえるだろう。その筑波に乗って『南洋時事』を執筆した志賀が，しばしばダーウィンの『ビーグル号周航記』などの著作を援用し，人種競争の観点から南洋に注目したことも同様の転用にほかならない。

こうした手法は，志賀重昂の代表作『日本風景論』（1894）でも繰り返されている。英国の基準から国内に対応する事物を見出し，比肩なり凌駕なりしていると強調する一方，逆に日本を中心にした基準から，周辺地域を序列化して編入するのである。例えばスコットランドの名勝フィンガルの洞窟について，志賀は兵庫県の玄武洞を取り上げ，「日本にもフィンガル窟あり，（中略）否，是等より優るもの此所に在り」と顕彰する一方（志賀1894, 110），台湾冨士や山東冨士などのように，帝国の拡大にあわせて新領土の高山を冨士山に相当するものとして見出していった。それは本文の改訂に伴って増補された樋畑雪湖の挿絵でも踏襲されており，利尻島の利尻山は，左手前の立木と奥の円錐の山を対比するという富士山の浮世絵でしばしば見られる構図で描かれている[11]。英国の価値観を受け入れて国内に対応ないし凌駕する玄武洞を見出してナショナリズムを鼓舞しつつ，その手法を日本中心になるよう再編して富士山に見立てた（しかし凌駕はしない）利尻山を編入する方法は，日本の帝国主義の縮図そのものにほかなるまい。

ただし，志賀は山岳について詳述したものの，海洋についてはほとんど語らなかった。それは志賀の性向でもあったろうが，後に幸田露伴や新村出らがこぞって嘆いたように，山岳に比べて海洋を描いた詩文が日本には圧倒的に欠けていたことも関係していたと思われる。事実，志賀が注目するのはもっぱら荒磯であり，それは火山がもたらす険しくも崇高な山岳風景の延長でしかない。しかも，その美しさを謳った詩文として志賀は，2編の英詩を引用することしかできなかった。それらは，いずれも東京で働く外国人教師が日本で刊行した長詩であり，およそ『日本風景論』以外ではまず引用のない忘れられた作品である[12]。その一つA. Miall作の詩

9）福井七子が1992年に*Echo*紙掲載の志賀の記事を復刻して以降，志賀のオーストラリアでの足跡は発掘が進んだ。詳しくはGavin（2001）を参照。

10）“Tsukuba”, *Sydney Magazine*, 1（10 May 1878）, 112.

11）志賀（1903, 176–177）の間の挿絵。沖合の船は西洋に由来する表現だろう。注13，14を参照。

12）前者は帝大で英文学を教えていたアーサー・ロイドであり，後者は一高で歴史と英語を教えていたジェイムズ・マードックである。『日本風景論』が多数の英語文献をそれと言及することなく援用していることは山本・上田（1997）に詳しいが，この英詩の典拠を指摘した研究は見つることができなかった。なお引用箇所は，Miall（1890, 45）と江の島近辺を謳ったLloyd（1894, 4）である。

とは，ジェイムズ・マードックが変名で書いた『日本におけるドン・ジュアンの孫』（1890）で，教え子の漱石が「間投詞が二つ続いていたと記憶する丈で，あとは丸で忘れて仕舞った」というお粗末な文体な上，内村鑑三が「淫蕩なる外人」の書と非難した曰く付きの作品である（平川1984, 41–42）。そのせいか志賀も彼ら「洋客」について詳しく語らず，題名も明記していない。長崎の入り組んだ海岸について，「湾になった丘が帯のように幾重にも連なり，小浜と小湾そして湾曲が続き，船上の年老いた乗客にはスカンディナヴィアのフィヨルドのように美しく思えた」と詠んだマードックからの引用は（志賀1894, 182–183），日本の海洋文化が西洋の視線を応用して創出されたことをはしなくも示している。複雑に入り組んだ入江や小島が散らばる海は，しばしば海賊が出没する場所となるが，そうした船の上から海岸を詠んだ詩文は漢学に長けた志賀でさえ引用できなかったからである。事実，海から陸を描いた『日本風景論』初めての挿絵は，日清戦争直後の第5版であり，それはいみじくも植民地となることが決まった台湾の港周辺の稜線を描くものだった[13]。このように，倭寇は過去の詩文書画とおよそ無縁であり，日本の海洋文化はつまりは植民地開拓や西洋化と連続していた[14]。海岸を（潜在的な）領土として注目し評価する視点をマードックの詩から導入するしかなかったように，倭寇を潜在的な領土拡大の先遣隊として見出す視点もまた，後述するようにマードックの史書から触発されたのである。

アレクサンドロス大王に反駁した海賊の逸話と明治日本での受容

倭寇への注目は，直接的には，日本の帝国化に伴う海国思想の宣伝と，倭寇ゆかりの土地が中国大陸への侵攻地点と重なったことが主な原因と考えられる。ただし，冒頭で紹介したアレクサンドロス大王の逸話の影響も無視することはできない。明治の初期から知られたこの逸話は，中国や朝鮮で略奪者として記録された「倭寇」に対し，貿易商や先遣隊として評価できる視点をもたらし，ひいては倭寇再評価の転機になったと考えられるからである。

管見の限り，キケロに由来するこの逸話を日本で最初に紹介したのは瓜生政和かと思われる。世界の地理や逸話を訳出した『智識初歩』（1875）の「海賊歴山王を詰る説」がそれで，「小勢を従えて小害」を為すと海賊と呼ばれるが，「大軍を率いて大害」を働けば英雄となるものの，

13）志賀（1895, 206–207）の間の挿絵。増野（2008, 106, 109）に従えば画家は中村不折。沖合に進みゆく船を配置するのは，次注の蘭書ほか（中村2015, 52–54），西洋の航海記では定番の構図である。

14）確かに谷文晁の「公余探勝図」には例外的に海上から陸を描く表現が見られるが，松平定信による海岸巡検の記録という性格もさることながら，François ValentynやJohan Nieuhofの舶載蘭書が収録するモルッカ諸島を海から臨む銅版画に学んだ可能性が高い（中村2015）。なお後述するデイヴィスらの航海は，香料貿易を独占するオランダへの対抗措置であり，そうした参入による軋轢からアンボイナ事件（1623）が起こり，英国勢力は駆逐された。文晁が参照したファレンティンやニューホフの航海と書籍において，香料諸島が特権的な地位を占めているのは偶然ではない。なお，「公余探勝図」が西洋絵画に触発されたとは沢村専太郎が中心となった『国華』261（1912, 228）で指摘され，銅版画の影響も示唆されている（沢村1931, 515）。ただし，海運関連の書物では，異国船からの「海辺警備」の記録であることがしばしば強調された（辻1930, 762）。志賀も，定信と文晁の巡検に触れて，伊豆を近代日本の造船所の始まりとして位置づけている（志賀1916, 39–40, 48）。

実は「君と我と只大小の差いあるのみ」と反論したと紹介されている（瓜生1875, 31丁）。瓜生がどの文献を参照したのかは不明だが，その訳文はピーター・パーレーの『万国史』（1837）にある本文と似通っており，地理と歴史上の逸話という『智識初歩』の構成も『万国史』と共通しているため，『万国史』のような年少者向けの入門書を複数参照して訳出したと考えられる。

パーレーの『万国史』はアメリカで刊行され，聖書の事績を歴史として描きつつ，その延長で世界の歴史と地理について子供向けに説明した入門書である。明治の日本でもっとも読まれた教科書の筆頭といってよく，例えば1874年以降の『万国史』の日本の章には，日本から本書を四百部も六百部も注文してくるという記述があるほどである（木村1969, 99–101）。したがって海賊版も含めて訳本は多く刊行されており，無名の海賊が大王をやり込めた逸話が明治の読者に目に触れる機会は多かったことだろう。確認できた最初の翻訳である『万国史』（1876）は，『智識初歩』の翌年の刊行であり，件の逸話の訳文とも似ているところが多く，両者がともにパーレーの『万国史』から訳出された可能性もあり得る[15)]。

さらに『智識初歩』の翌年，『万国史』の訳本と同じ年に，中村正直も『西稗雑纂』（1876）でこの逸話を「歴山寛量」と題して訳出した。『西国立志編』（1870）刊行後，中村が多数の西洋の逸話を四文字の題目で要約し，達意の漢文で翻訳した逸話集である。ここでは，海軍も海賊も行為は同じで名目が異なるだけという海賊の反問に感心した王は，賊の捕縛を解いたという場面が記されている。興味深いのは，逸話後に追記された中村の評言である。皇帝と盗賊は程度の差があるだけで正邪の区別はできないと言い切れるかどうか，困惑せざるを得ないというのである[16)]。程度の差ではなく，徳の有無から賊が王となることを良しとする易姓革命とはおよそ対立する考えなので，中村が戸惑ったのも無理はあるまい。本書は，西南戦争の前年，「御一新」か「瓦解」かで評価が揺れた過渡期に出版されており，時世も手伝ってのことだろう。

ただし，中村が記した海賊解放のくだりは『万国史』にはない。おそらく中村が参照したのは『パーシー逸話集』かと思われる。その「海賊の雄弁」という逸話は，「アレクサンドロスは，無遠慮な罪人に不快になるどころか，その力強い訴えに感服して，男を罰せずに解放した」という一文で締めくくられているからである[17)]。『パーシー逸話集』とは，英国のT. Byerleyと J. Clinton Robertsonが筆名で古今東西の逸話を編集したもので，1820年から刊行が始まって1823年に全20巻で完結した。逸話は難破や戦争など主題別に分類されており，一世紀に渡って人気を博し，逸話集の代名詞となった[18)]。夏目漱石が『文学論』（1907）で引用しているのは有

15）パーレー（1876, 287）に「寡少ノ人ヲ以テ些少ノ害」をなすのが海賊で，「大軍ヲ以テ大害」をなすのが王だとして，その違いは「唯,多寡ニアルノミ」とある。原文は"The only difference between us is, that I have but a few men, and can do but little mischief; while you have a large army, and can do a great deal" で，『智識初歩』も『万国史』も違いは程度にあるという一文を補っている。Parley（1862, 171）及び後の丸善刊行のParley（1881, 223–224）参照。

16）原文は「事同而名異耳」,「果如此言則皇帝与盗賊有大小之分無邪正之別耶吾甚惑焉」である。中村（1876, 6丁–7丁）を参照。

17）Sholto and Reuben Percy（1820, 119–120）.著者の「パーシー」は，1678年に刊行されたWanleyの復刻や縮刷版から引用したのかもしれない。Wanley（1806, 340）にほぼ同じ逸話が収録されている。

18）例えば，*Encyclopaedia Britannica*（1910, 2）の「逸話」の項では本書が最良の例だと言及がある。

名だが[19]，表現も平易なため日本では英語の読本としてもよく読まれ，『万国史』同様に縮約本や合巻本なども多数刊行された。そのため中村が参照した版を特定するのは困難だが，版の間での異同はあまりなく，事実，比較してみれば中村の訳文と英文はほぼ対応していることがわかる。例えば，中村の記した「事同而名異耳」は，「我々の間に違いはないんです，ただ悪事を働くための手段と名前が異なるだけで」（“Sir, there is no difference between us, but in the name and the means of doing mischief”）を見事に要約するものだろう[20]。

このように，『万国史』であれ『パーシー逸話集』であれ，瓜生や中村の紹介であれ，巨大な帝国を築き上げることと海賊行為はさしたる違いがないというキケロ以来の指摘について，明治以降の読者層が目にする機会は多かった。アウグスティヌスの意図は，所詮，世俗の権力者は海賊でしかないという点にあり，そのため明治初期の中村は海賊の反駁に同意できかねていた。しかし，明治の後半になり，日本が本格的に帝国化していくと，規模や立場が異なれば海賊は王になりうるという発想に注目が集まり，それは倭寇の再評価とも連動していったのである。

その好例が，後に『過去に於ける海上の日本人』（1897）を刊行するなど，海国日本の歴史と倭寇を喧伝した先駆けとなった足立四郎吉（栗園）である。足立はその「八幡船」（1894）を，海賊は海軍にほかならないという確認から説き起こしている。倭寇は字義から見れば海賊ではあるが，そもそも「見よ堂々たる十九世紀の英国海軍とても，昔は印度東海を荒したる海賊たりしなり，今も尚樺太千島にこそこそ海賊の所業を働く文明の海賊あり」と，海賊と海軍は連続した存在であることから，倭寇もまた海軍だったと断言するのである。確かに足立のいう「海賊は治世の海軍にして海軍は乱世の海賊なり」は，魏の曹操を評した「清平の奸賊，乱世の英雄」や「治世の能臣，乱世の姦雄」を思わせる。しかし，平定した側に立つかどうかで海軍と海賊かの呼称が変わるという点では，むしろアレクサンドロス王への反駁と似通っていよう（足立1894, 780）。

事実，足立は，倭寇を水軍と区別せず，彼らが駆使した八幡船を特記することで，その経済的かつ軍事的な活動を特記した。それは瀬戸内海などで国内の船を襲った海賊行為ではなく，対外的な衝突や交易を強調するためでもあるだろう。さらに足立は，倭寇の悪名は，王直や徐海のような中国の頭目に由来し，八幡船の精神は現下の中国との海戦にも息づくと強調した。そもそもこの論考は，1894年7月の豊島沖海戦の興奮冷めやらぬ中で書かれており，巨大な運送船を急襲する海賊船が清国艦隊への攻撃に重ねられ，「進んで退かざるの勇気こそ，実に国の宝，軍の勝利なり」と結ばれている。鎖国によって消滅したかに思われた倭寇の精神が，「長夜の迷夢」から覚め，日清戦争で復活したというのである（足立1894, 779, 783）。こうした言説

19）ギリシャ文字のEta, Beta, Piで，Eat a bit of Pieと読ませたホガースの機知を伝える逸話である（夏目1995, 298）。これは例えばPercy（1870, 261）あたりの翻訳であろう。

20）“Pirate’s Defence”（Percy 1850, 20）．収録しているのは旧版にアメリカに関する逸話を追加した2巻本である。

は，その後，大陸への侵攻が本格化するにつれて，幾度も繰り返された。一例だけ挙げれば，瀬戸内海を舞台に『宝島』を翻案した『龍神丸』（1926）でベストセラーを生んだ高垣眸も，「水軍」には言及することなく「倭寇」を「八幡船」と言い換え，その「海外発展」が徳川の「泰平無為の惰眠」から覚醒して復活することを自序で力説している。小説内での，因島の海賊が「狭い日本の国内で争う事を好まず，八幡船の群を従えて（中略）遠く八方に遠征して，国威を海外に輝かした」という説明が，足立の延長にあるのは明らかだろう（高垣1926, 4, 11）。

倭寇を日本海軍の原型とみなす言説も，日清戦争以降，倭寇再評価の主軸となる。その際，海賊と海軍がさして違わないと説明するために援用されたのが，件のアレクサンドロスの逸話だった。例えば伊藤銀月の『日本海賊史』（1906）には「海賊と云えば，忽ち歴山王に対立して寸毫も譲歩せざりし快男児の徒を憶出す」とあり（伊藤1906, 1），倭寇についての最初の一般書である長谷川正気の『倭寇』（1914）の序文でも，「一国を略れば王と呼び一家一郷を掠むれば賊という，扨もお可笑や」とアレキサンダーを嘲りし言葉の中にも一面の真理あり」と紹介された。そうして征服者と海賊の違いは規模の多寡にあるという，『万国史』からの英語原文が引用されるのである[21)]。

この長谷川の『倭寇』は自費出版に近かったが，本人によれば，類書がまだ少なかったこともあってよく読まれたという。そんな本人の後書きを収める1943年の改版『八幡船史』を見れば，約30年間で倭寇を帝国の尖兵として顕彰する宣伝がすっかり定着したことが見て取れる。「大和民族の開拓者精神」の発露として八幡船をとらえ，大東亜共栄圏建設の歴史的使命を強調する松岡洋右の序文が巻頭に置かれ，「八幡船考」（1927）で話題となった新村出の序文まで追加されている。1937年に日本軍が侵攻した杭州湾が倭寇ゆかりの土地だったことで注目が集まり，倭寇の歴史的な意義が強調されたことに触れて，新村はその時の「驚喜」を回顧しつつ，八幡船の活躍が「日本海軍の建設」へとつながり，ひいては「皇軍の活躍」を後押しすると述べるのである[22)]。ただし両序文では「倭寇」という名称は使用されていない。この言葉が中国ほか国外の史書に由来し，「寇」が略奪を示唆するため，1941年には師範学校の国史の教科書から「倭寇」が消え，八幡船のみになったのを踏まえてのことと思われる[23)]。本文では「倭寇」も使用されているが，題名が『倭寇』（1914）から『八幡船史』（1943）改題されたのも同じ配慮だろう。にもかかわらず，そのまま掲載された旧版の序とパーレーの原文は，英国であれ日本であれ，名のみ異なるだけで海軍は海賊にほかならないことを図らずも露呈させている。

21）長谷川（1914, 5, 7）．前掲のパーレーと原文は同じであるが，長谷川は原文にはない“The Pirate of Thrace”と題して，トラキアの海賊の話として引用している。

22）村田（1943, 5–6, 7–8）． なお長谷川は『倭寇』出版後に村田に改名したという。

23）1941年3月6日付『読売新聞』朝刊「“倭寇”の名抹殺」などを参照。

タイガー号ジョン・デイヴィス殺害事件の記録とその流布

冒頭で触れたジョン・デイヴィスの殺害に注目が集まったのは，前述のように海賊を海軍の起源として再編する視点あってのことであった。事実，倭寇の再評価と関連させてこの事件を日本で最初に特記した一人は，前節で言及した「八幡船」（1894）の足立栗園である。足立は，八幡船の勢力が遠く南洋にまで及んでいたことを記した後，「英国船タイガー号はバンタンよりバタビヤに渡航中此八幡船に邂逅して一撃の下に其船長テービスを殺され，其当時乗合の一士官は書残して，印度の諸港に於ては日本人の兵器を携えて上陸することを許さず，これ慓悍決死の徒にして，到る処恐怖したるに由る」と追記している（足立1894, 780-781）。名前を誤記しており，水先案内人を船長と誤解しているが，この一文は，衝突を伝える後述のサミュエル・パーチャスの記録と一致しており，足立が何らかの形でこの記録を見ていたことは疑いない。重要なことは，このような倭寇の狼藉ゆえに，南洋諸国の王が家康に宛てて取り締まりを申し入れたとして，足立が国内の書簡と対応させたことである。デイヴィスなどヨーロッパの史料と日本側の史料を突き合わせる作業は，歴史学が洗練させていくことになるが，デイヴィスの事件は英国にしか記録がないため，時流にあわせて空想や想像をいたく刺激していったのである。

ここで同事件についての英国側の記録がどのようにして知られるようになったのか概観しておこう。この事件について述べたタイガー号の逸名の乗組員による手記は，*Purchas His Pilgrimage*（1613-1625）に収録されて公刊された。英語圏で広く知られるようになったのは，Albert Hastings Markhamが上記の手記を含む*The Voyages and Works of John Davis*（1880）を編集して以降のことである。ほかにも西欧に残る日本の記録を編集して重宝されたRichard Hildrethの*Japan as it was and is*（1855）が，パーチャスからの引用として事件の概要を紹介しており，足立はおそらくこれを参照したと思われる[24)]。一方，日本では，1902年末にパーチャスからの原文とその訳文が『大日本史料』に「海賊，英吉利船ヲ「ビンタン」（Bintang）ニ襲イ，其按針「ジョーン，デヴィス（John Davys）ヲ殺ス」と題して収録され（618-627），研究が本格化していった。英語圏でも1905年から1907年にかけて，*Hakluytus Posthumus, or Purchas his Pilgrimes*と題してパーチャスの旅行記集成全20巻が復刻され，入手が容易となった。また日本に関する箇所のみ集めた*Purchas his Pilgrimes in Japan*（1939）も日英で同時に販売されてもいる。デイヴィスは著名な航海士で，フォークランド諸島の「発見」者であり，北西航路の探検によってカナダとグリーンランドにある海峡が彼にちなんで名づけられたほか，四分儀と

24）日本人の向こう見ずな側面を説明する逸話として同事件を紹介したヒルドレスは，デイヴィスをタイガー号の“master”と記しており，それで足立は「船長」としたのだろう。ヒルドレスが記す最後の一文“The Japanese are not suffered to land in any port of India with weapons, being accounted a people so desperate and daring that they are feared in all places where they came”を見れば，前述の足立の引用がほぼこの翻訳となっているのは明らかである。Hildreth（1855, 557）を参照。

いう観測器具にもその名を残している。しかし，その著作を編集したMarkhamが，*A life of John Davis*（1889）で悲劇的な死を描いたくらいで，事件は特に英国で注目されることはなかった。

それではパーチャスの記録に従って，両者の遭遇を再構成してみよう。この事件はタイガー号乗組員の手記にしか記録がないが，概略は以下の通りである。1605年12月27日頃，シンガポール沖にあるビンタン島の近くで，デイヴィスが水先案内人をつとめる商船タイガー号は，座礁して動けなくなった倭寇のジャンク船を発見した。Edward Michelborneを船長とするタイガー号とTiger's Whelp号は，時折，商船を略奪しながら，中国や日本への航路を発見しようと航海の途上だった。1601年から1603年にかけて英国東インド会社が初めて東南アジア方面への船を組織した際，デイヴィスは水先案内人として航海を成功させたので，その実績が買われたのだろう。本来，こうした航海は東インド会社にのみ認められていたのだが，ジェイムズ1世はミケルボーンに特別に勅許を与えたのである（Markham 1880, lxxi-lxxii）。発見したジャンク船には米が積まれており，およそ70トンの船に90人の倭寇が乗っていた。倭寇の話によれば，「中国とカンボジアの海岸で海賊行為を働いた」後，船が水漏れして，日本へ帰れなくなったのだという（Purchas 1905, 361）。その「中国沿岸についての（中略）知識」を得るため，海賊たちはタイガー号に招待されることとなり，一方で，ジャンク船も積み荷を調べられることとなった。書き手の「私」は，もし「捜索中に，彼らにとって好ましくないものが見つかれば，突然，私の部下を襲って斬りつけるかもしれないと疑い」（362），武器を取り上げるよう，二度もデイヴィスに人を送ったが，聞き入れられることなく，捜索は一日に及んだ。日が暮れたものの，船員が見つけたのは，湿って悪くなった米ばかりだった。その時，合図の声が響き，両方の船にいる倭寇が一斉に襲いかかってきたという。デイヴィスは6–7か所を斬りつけられてすぐに死んだが，戦闘は4–5時間の長きに及び，ついに半カルバリン砲で倭寇ごと吹き飛ばす策が取られた。壁や板ともども手足が引きちぎれ，目を覆うような惨状の後，手記は以下のように倭寇の最期を説明している。

> この一連の争いの中で，もはや逃げられないにもかかわらず，誰一人命を惜しむ者はいなかった。それだけこの日本人たちは必死だったのだ。ただ一人だけが船上から飛び込み，そのあと，我が船まで泳いできて助けを求めた。彼を引き上げ，お前たちの目的は何だったのかと聞いた。我々の船を取り上げて，喉を掻っ切るつもりだった，と彼は答えた。それ以上，彼は何も言わず，切り刻まれるのを待っていた（363）。

彼は絞首刑を命じられるが，縄を切って海に飛び込み，そのまま行方不明となったという。その後，タイガー号は２隻の中国船を襲って絹を手に入れ，英国へ帰着した。端的にいって，航海はさしたる成果を挙げることなく，通商の目論見は失敗に終わったのである。

このタイガー号襲撃事件を，海洋帝国日本の一つの起源として注目したのが，ジェイムズ・

マードックであった。マードックは前述した『日本におけるドン・ジュアンの孫』を書いた後，長く参照されることになる『日本史』（1903）を自費出版した。ヨーロッパ側の史料を駆使し，山縣五十雄らが訳した日本の史料と比較しながら，隔絶していると思われていた日本を世界の歴史の中に位置付け，明治以降の日本の帝国化は，鎖国中に途絶していた帝国の復活であると示唆したのである。日本人協力者の感化もあってか，マードックは，日本が短期間で近代的な海軍を導入し帝国となった一因を，16–7世紀の倭寇や商人，そしてそれを可能にした造船技術に求めた。一方，当時の西欧列強の商船が海賊船と変わらなかったことも包み隠さず明らかにした。例えばJames Lancasterのマラッカ近辺の探検で「東インドの海で英国人は「海賊」と同義」となった反面，「当時の英国海軍は格段に強いわけではなかった」ことを注記した。さらに，日本が海禁策を採らなければ「総トン数においても武装においてもスペインに引けをとらない艦隊」を整備し，マニラを征服していたかもしれないとまで記したのである（Murdoch 1903, 466, 581, 688）。日本人があまりに攻撃的なので上陸を避けられているという，足立が訳したパーチャスからの一文をマードックも引き，「エリザベス朝の偉大な船乗りの一人を死に追いやったのは，なんと日本人だった！」と，歴史書には不似合いな間投詞ならぬ感嘆符を付けてデイヴィスに言及した。つまり「奇妙にも極めて静かに戦った日本人は，その剣で恐ろしい処刑を行ない，この悲惨な事件で犠牲となった一人がデイヴィスだった」というのである（Murdoch 1903, 579–580）。

日英同盟の翌年，朝鮮半島での権益をめぐってロシアと戦う前年に，日本が西洋列強と並ぶ海洋帝国をアジアに築き上げていたかもしれないというマードックの記述が，日本のナショナリズムを刺激したことは疑い得ない。以降，マードックに後押しされて，日欧の記録を比較対照する対外交流史が日本で盛んになる。いわば荒磯の再評価でマードックの詩が援用されたように，倭寇を再評価する視点もマードックの史書から多大な影響を受けたのだった。

『大日本史料』に収録されたタイガー号事件は，こうして同じ倭寇再評価の枠組みで注目されることとなった。代表的な例を三つだけ挙げておこう。もっとも実証的な例が，倭寇や勘合貿易について論じた歴史家の川島元次郎である。川島は，「邦人海外雄飛の跡，西籍に現わるるもの的確にして転た其光景を彷彿せしむる」としてタイガー号の襲撃を詳述し，それゆえ倭寇の狼藉を詫びる政府の書簡が出されたのではないかと日本側の史料を挙げた（川島1916, 228–231）。足立栗園の試みがついに歴史研究に組み込まれたのである。次にマードックの枠組みと見立てを拡大したのが，その『日本史』を高く評価した竹越与三郎の『日本経済史』（1920）である。竹越は，世界の歴史はほぼ同じ過程を辿るとして，倭寇を英国の私掠船やノルマンの海賊になぞらえた（竹越1920a, 477, 484–485）。戦後，田中が批判した安易な比較や比肩は竹越から始まるといってよい。竹越は，「倭寇，東洋全体に波及す」と題して和漢洋の記録を挙げ，それだけ彼らが恐れられていた例としてパーチャスを参照してデイヴィスの殺害に言及した（竹越1920b, 295–297）。そしてマードックの仮定がほぼ現実であったかのように，各種の記

録を見れば「日本人が南はフィリッピンを境として北は亜細亜大陸の南端から，マレー半島に及び，殆ど至る所に殖民地を有し，貿易を営んだ状態を髣髴する」と記したのである（竹越 1920b, 325）。一方で，竹越は「殖民地」たる日本町が鎖国で切り離され，消滅していったことを記したが，そんな負の側面に注目したのが，徳富蘇峰の代表作『近世日本国民史』（1924）であった。徳富は，パーチャスを引いてデイヴィスの死に言及し，英国人が挑発した可能性を示唆しつつも，「当時の日本人は侮辱せらるるよりも，寧ろ畏怖せられた」ことに注意を促した。つまり，「斯る日本人の植民は，決して世界の何処よりも歓迎せられなかった」として，日本町が消え去ったのは，鎖国政策もさることながら，住民が厄介物扱いされた報いでもあると結論づけたのである（徳富 1924, 191–192）。

G・A・バラードの『日本の政治史における海の影響』（1921）と日本での受容

こうした「アジアの英国」日本の拡大と海軍は，アジアにおける英国の地位を揺るがせかねないものだった。日米の対立が露わとなり，日英同盟の更新の是非が日英米で話し合われるワシントン会議の前年，マードックに多くを負う書物が英国の元海軍中将によって刊行され，話題を呼ぶことになる。G・A・バラードの『日本の政治史における海の影響』（1921）である。題名が，日本の海軍にも多大な影響を及ぼしたアメリカの歴史家マハンの『歴史におけるシーパワーの影響』（1890）を踏襲しているように，バラードは日本のシーパワーの重要性を特記した。

例えば，日本の複雑な海岸線と良港の多さから，この環境はノルウェーのヴァイキングと同じで，日本人に戦闘的な気質を育んだと記している（Ballard 1921, 13–14）。いずれも風景から恣意的に引き出された憶測とはいえ，フィヨルドとの類似を展開するだけだった『日本風景論』とは好対照をなしている。ただマードックの影響は明らかで，バラードは足立以降の海国日本の宣伝を裏書きするのように，日本は神功皇后からの海洋国家であると強調し（15），北欧のように海賊が広く東アジアで活躍した過去があり，現下の日本海軍の発展は，突然変異ではなく，海国日本の復活と強調している（16–19）。そのことは，文禄・慶長の役と日清戦争を共に“Korean War”ととらえ，後者を前者の捲土重来とみなすところからも明らかだろう（6–9）。さらにバラードは，日本が鎖国せず，今日の日本人のように西洋の最新の戦艦に学び，エリザベス一世のように好戦的な日本の将軍が海賊と軍艦を操った世界を仮定し，マードック以上に具体的に書き記した。つまり，「日本の74門艦の船隊が西太平洋全域を支配し，陸軍との共同によって，ミカドの領土はマレー諸島からおそらくオーストラリアにまで広がり」，「スペイン，オランダ，ポルトガルの東アジア植民地支配は，将軍とよほど友好的な関係を保っていない限り，成立せず」，相当な海軍をインド洋に配置しない限り，「インドにおける英国の地位も危うくなっていたことだろう」というのであった（71）。

ただしバラードは，直接，タイガー号には触れなかった。あくまで「衝突は引き分けに終わり，血なまぐさい長時間の闘争の末に，英国人船長が殺された」事件があったと，示唆するにとどめている。とはいえ，降伏という言葉を知らない日本の「サムライ」には，スパルタ軍のテルモピュライでの戦いのような白兵戦が多いと述べた後に続く説明は注記してよい。つまり，「何らかの理由で敗北が避けられない場合，彼は主人よりも生きながらえるくらいならと，自らの手で死ぬのが常ではあったが，それは敵に何らかの爪痕を残してからのことだった」というのは，全滅覚悟でデイヴィスらに斬りかかった倭寇を否応なく連想させるからである（3–4）。

なおバラードは，第一次世界大戦中，マルタ島海軍基地の司令官だった。その際，船団護衛として派遣された日本の特務艦隊を地中海で迎えており，日本の海軍を評価していたといわれる（関2003, 85: 平間2001, 65）。しかし，先の「サムライ」の描写が，潜在的脅威を強調し，自国の軍縮に歯止めをかけるためなのは明らかだろう。ただ，ワシントン会議の前だけに，退役軍人とはいえ自著が日米で読まれることは織り込み済みであり，当然，政治的な意見は周到に避けられている。バラードは，同盟の更新如何にかかわらず，日米双方に悪印象を与えないよう周到に表現を選び，かつ日米双方が英国を同盟国として必要とするよう主張を展開したのだった。例えば秀吉を退却させた李舜臣について，「運命の力により，この平凡で目立つところのない人種から危機を救う男が生まれた」と留保して日本への刺激を避けつつも，李をネルソンと並ぶ偉大な提督と絶賛している。つまりは新たな“Korean War”の危機から第二の李が生まれると示唆したわけである。日本の朝鮮支配黙認のバーターとなっていた英国のインド支配不干渉について，日本のアジア主義者がインド独立運動を支持し，日英間の懸案になっていたことを考えれば，三一運動以降の朝鮮のナショナリズムを見越した巧みなリップサービスとさえいえるだろう[25)]。

日本人の「精神と社会本能の本質的な違い」を強調し，アメリカであれオーストラリアであれ，ヨーロッパ人は「ヨーロッパ以外の出身の人」と共存できないというのも，日米の懸案だった移民や人種問題についてアメリカ側を支持した現れだろう[26)]。その点で注意をひくのは，およそ双方に理性があれば日米戦争は勃発しないとしつつも，戦時の際には周辺に列強の基地がないため，日本海軍に対して約3倍の戦力が必要と試算したところである（Ballard 1921, 291）。つまり，アメリカや英国だけの軍艦では不足ということであり，ワシントン会議で主力艦の比率が英米日で5：5：3となったのは，バラードにとって期待通りの結果だったに違いあるまい。

事実，バラードが過去に仮定していたことを，あるいは後に竹越が思い描く過去を，すでに

25）事実，アメリカで朝鮮独立運動を訴えていた雑誌は，前段の留保には触れずにバラードの李舜臣評価を特記し，エリオットの著作を挙げて李舜臣は毒ガスも使用していたと主張している。*Korea Review*, vol. 3（1922, Jan.）5–6参照。エリオットが依拠した日本の資料は不明だが，Richosun（李長孫）発明のshin-ten-rai（震天雷）は（Griffis1911, 113），真偽はともかく講談などでよく登場する。

26）Ballard（1921, 293–294）．呼応するようにして，米国議会の公聴会では日系移民が同化できない根拠の筆頭としてバラードが引用された。*Nonassimilability of Japanese in Hawaii and the United States*（1922, 18）．その後バラードは，*America and the Atlantic*（1923）や*Rulers of the Indian Ocean*（1927）の著作で英米協調とアメリカの人種的な障壁の必要性を力説することになる。

英国政府は起こりうる未来として警戒していた。早くも1921年の6月には，デイヴィスが殺されたビンタン島の向かいにあるシンガポールへの海軍基地建設が決まり，その閣議の直前，帝国防衛委員会は，「今後，最も起こりうる戦争は，太平洋に利益を置く白色人種と黄色人種の間のものになるだろう」との予測を報告していた（Hamill 1981, 25）。こうした日英の対立と，バラードが参照したマードックも無縁ではなかった。マードックはオーストラリア政府から依頼を受けて，1920年から翌年にかけて日本で情報収集を行っている。調査の結果をヒューズ首相に報告したマードックは，日本の軍国主義の脅威と日米の軍事的な緊張を強調したが，ヒューズは，それなら日英同盟はオーストラリアにとって日本を食い止める楯になると考え，ロンドンの帝国会議ではあえて更新を表明した（Meaney 2009, 477–478）[27]。むろんそれは少数派であり，1921年の暮れから始まったワシントン会議で日英同盟の廃棄は正式に決定される。

ワシントン会議が終了した1922年2月，バラードの著書の詳しい内容が『日本読書協会会報』で三上正毅によって紹介された。バラードが望んだ通りかどうかはともかく，彼の日本海軍の評価は，倭寇や海軍についての書籍でしばしば引用され，日本の帝国主義をいっそう刺激した。『日本風景論』に挿絵を描いた樋畑雪湖もその一人である。彼は交通史の研究家でもあり，三上の要約するバラードを引用し，もし倭寇の船が堅牢で操縦に習熟していたなら，西洋の海賊行為を放置せず，浙江や福建は日本領だったろうと記した（樋畑1934, 54–55）[28]。バラードの著作は翻訳されなかったので，三上の要約があたかもバラードの言葉のように引用されたが，三上はバラードをいささか誇張していた。特に好まれたのは，日本が鎖国しなかった世界を想像した一節だが，そこでは肝心の付帯条件が訳されていない。つまり，日本が「盛に大艦巨舶を建造し，欧洲の諸国と交通接触したらんには，西班牙，葡萄牙，和蘭等の植民地は決して彼等の領有に帰せなかったであろう」し，「印度に於ける英国の支配すらも，頗る疑問」であり，「欧州諸国民の見地より云えば，爾来三百年間，日本が鎖国主義を取ったのは勿怪の幸福」というのである。それだけでなく三上は，したがって「日本は三百年の間，武陵桃源の快夢を貪り，欧洲諸国は其飽くなき貪欲を擅にすることが出来た」という原文にない一文まで追加したのである（三上1922, 24–25）[29]。

こうしてバラード以降，竹越を筆頭に東洋に雄飛した倭寇という言説は一層盛んとなる。しかし，倭寇の雄飛と可能性が強調されれば，それだけその後の落差も見過ごせなくなる。日中戦争開始を見込んでだろう，竹越は再録した『日本経済史』の一部を増補して『倭寇記』（1938）を刊行したが，そのなかで竹越は，タイガー号で全滅した倭寇に触れて，もし「国家の後援があったら」，彼らは歴史から消え去ることがなかっただろうと悔やんでいる（竹越1938, 199–200）。

同様に嘆かれたのが倭寇文学の貧困だった。大正元年である1912年，新村出は，倭寇がほと

27）後に山縣は，マードックがヒューズ首相を動かしたと示唆したが（山縣1926, 174），誤解である。

28）樋畑は逓信博物館の展示収集に尽力しており，その八幡船の展示は持論の延長と考えられる。

29）三上は財政学者だが，むしろ日本読書協会での洋書紹介や大日本文明協会での翻訳で名を成した。

んど文学に足跡を残さなかっただけでなく，「明治の聖世は終に是等海賊を題材に使う」ことがなかったと嘆き，後代に希望を寄せた（新村1915, 145）。しかし，高垣眸の『龍神丸』（1926）など『少年倶楽部』の小説をのぞけば，国民文学といえるほどの倭寇小説はついに登場しなかった。おそらく新村の希求にもっとも答えたのは，1930年代以降，倭寇の活躍とデイヴィスの死を講談のように語り，海軍の宣伝として広く知らしめた鈴木秀次海軍大佐というべきだろう。

鈴木秀次の海軍宣伝と書き換えられるタイガー号事件

1932年4月3日付の『読売新聞』別刷の「よみうり少年新聞」に，「日英水軍の大激戦！」の見出しで鈴木秀次による見開き2ページの記事が掲載された。「日支事変」に限らず，倭寇の頃から日本の海軍は偉大であったと解説した談話である。故郷伊予の水軍こそが倭寇の主力となり，日本海軍の基礎となったとは鈴木の持論だった。ここで鈴木は，バラードの著書にタイガー号のデイヴィスが倭寇に殺された史実が記載されており，伊予水軍の能島家の文書に英国と和睦したとあるのは，この時の衝突を指していると述べたのだった。こうした「無名の英雄」により日本は侵略を免れたにもかかわらず，水軍は徳川によって削減縮小されたという。さらに読売新聞の同年6月6日の朝刊になると，海軍省史料編纂官海軍大佐の名で鈴木が「日英海賊戦」という「愉快な新事実」を発見し，その概要が9日夜の東京のJOAKで放送されるという記事が掲載されている。「材料発見のヒント」はバラードの著作で，そこに「七百噸のジャンク八幡船」と英国船が「沖合」で出会って，「日英最初の猛烈な戦端が開かれ英国の海賊船長は日本刀の錆となり我が八幡船の猛者も飛び道具には敵わなかったと見え大半討死にして戦いは引き分けとなった」と書いてあり，日本でそれに対応している文書を探したところ，偶然，伊予水軍が「イギリス」と「和睦してその禍を除けり」という記録が見つかったという。これまで見てきたように，鈴木のいう「日英海賊戦」に「愉快な新事実」はなく，あるのは捏造である。そもそもバラードにデイヴィスの記載はない。鈴木はパーチャスが記した70噸の船とその座礁，倭寇の全滅などの記述を改竄し，水軍の古文書も曖昧にしか引用せず，出所も明記していない。

にもかかわらず，海軍の宣伝に有益と考えられたためであろう，鈴木以降，デイヴィスの事件は「愉快な新事実」として，さすがに10倍にされた700噸の八幡船は別として，おおむね鈴木を原型として語られていくことになる。その典型が鈴木の海軍宣伝を肉付けした『南海雄飛記』（1934）である。バラードからと称して倭寇とデイヴィスの船が互角に戦ったと記し，そこから能島家の日英不可侵の和睦を説明し，パーチャスによって日本人が全滅したかのように書き換えられたというのである。つまり，パーチャスの記述から読み取れるのは，英国側が饗応で油断させて積荷を略奪しようとしたため，やむなく日本側が攻撃したことというのである[30]。

30）実業之日本社編（1934, 278–282）．本書は半年後に出た芦間（1934）と文章と構成が酷似している。ほぼ『南海雄飛記』の要約であるため，両者とも海軍宣伝の一環かもしれない（芦間1934, 383–385）。

すでに徳富蘇峰も示唆していたこの解釈は，以降，物語でたびたび踏襲されることになった。

容易に想像がつくように，1941年12月のマレー沖海戦は，鈴木にとって再びタイガー号事件を取り上げる契機となった。「英国興隆ノ出鼻」を挫いた300年後の「同月同所」で，日本の海軍が「大英帝国崩壊ノ第一歩」をもたらしたと講演したのである（鈴木1942, 7-8）[31]。ただし，英国と交戦する直前から，タイガー号との衝突は全滅ではなく，日本が引き分けしたか勝利したかのように鈴木の「新発見」を踏まえて語られていた。以下，それら宣伝の色濃い物語を簡単に概観しておこう。最初の例は，五十公野清一の短編「ボルネオ沖の日英人大合戦」（1941）である。デイヴィスが八幡船を見つけ，倭寇を饗応することで船を奪い，明るくない中国の海岸を案内させようという魂胆だったのだが，英国の水夫が荷物を探って奪おうとしたことから，衝突が始まる。タイガー号は，何倍も大きな船だったが，戦闘は「五分五分」となり，日英で不可侵の同盟が結ばれたという（五十公野1941,180-181）[32]。萩原新生の「日・英ボルネオ沖の海戦」（1942）も，パーチャスとバラードに基づくとして鈴木の「新事実」を再構成するものである。パーチャスの記す命乞いをした生き残りが「余りに誇張がひどすぎる」として，ただ大勢で包囲しただけだろうと憤慨してみせるのは，青年教育のための本であることと，戦陣訓（1941）の現れにほかなるまい（萩原1942, 195）。

鈴木の「新事実」をさらに捻じ曲げ，倭寇勝利の物語へと作り変えたのが，元毎日新聞記者で，海軍宣伝の書籍を多く書いた永松淺造である。永松は「海戦実話」と題した実録記事の体裁で，パーチャスを「ボルチャス副艦長」として登場させた。永松は倭寇の全滅をパーチャスによる捏造と印象付けたかったのだろうが，そもそもパーチャスは旅行記を編集しただけで航海に出ていない。襲撃の理由についても，デイヴィスが倭寇を夕食に招待しているすきに，八幡船の積荷を奪いとろうとしていたため，それを予め見ぬいていた倭寇が八幡船からの合図を聞いて斬り殺したことになっている。永松の記事によれば，タイガー号は八幡船よりもはるかに大きかったが，倭寇が猛攻したため，日本の死者19名に対し，英国人の死者は約100名に及び，英国船は降伏し，以来，「外国人たち」は八幡船に恐れをなしたというのである（永松1941, 23-24）。

このように根拠なく戦果を捏造した永松は，さらに開戦後，同工異曲の小説2編を公刊した。いみじくも，大本営がミッドウェー海戦での敗北を隠蔽した1942年6月以降のことである。同年8月に刊行された海軍省監修の『海ゆかば』で，太平洋上の米国空母を全滅させたという虚報を高揚した調子で記す永松は（48），タイガー号事件を「三百年前の日英マレー沖海戦」と見立てて，英国が屈服した物語に仕立て上げた。「ポルチャス」副艦長が降伏する八幡船の長が

31）同資料閲覧については愛媛県立図書館えひめ資料室のご厚意に深く感謝したい。

32）五十公野は『文芸戦線』とは距離を置きつつも1920年代に農民文学を提唱していたので，ことさらに協力を強調せざるを得なかった可能性は考慮する必要があるだろう。

村上源内というのは（永松1942a, 343–344）[33]，伊予水軍がデイヴィスを襲撃したという鈴木大佐の持論そのものである。事実，1942年12月に刊行された別の短編は，鈴木の講演を小説化したような内容であった（永松1942b, 264–265）。ここでも副長「ポルチャス」は村上源内に降伏するのだが，「伊予の水軍大将であった能島家に伝わる正確な記録には，日本人の大勝利を述べた記事と英艦の警約書の写が遺っている」と，鈴木の曲解を史実のように記し，パーチャスの記した事件の顛末は「あたかも，大東亜戦争で徹底的な敗け戦をしながら，勝った勝ったと自国の国民を騙しとおそうとする米英の虚偽の宣伝みたいなものだ」と笑い飛ばしたのである（265）[34]。

ただ戦局の悪化は，そんな「虚偽の宣伝」にもすでに影を落としていた。永松の後者の短編を収めた『壮烈海国魂』の序文で，海務院海務課長今村了之助は，「八幡船，朱印船等の乗組員が，祖国の名誉のために敢然として外人と戦って，わが海国魂を遺憾なく発揮した痛快なる事実」（3）と，多分にタイガー号事件を顕彰しつつも，「長期戦と戦域の拡大」（2）には「商船魂の昂揚と強化」が必須と銃後の「一死報国」を呼び掛けざるを得なくなっていたのである。永松も，米国の潜水艦を沈没させたと喧伝された宝洋丸や辰鳳丸といった輸送船に，タイガー号を襲撃した八幡船の精神は息づいていると小説を結んだ（266）。

最たる例は小野俊一の『大東亜ものがたり』（1944）だろう。日英対立の因縁を強調して，タイガー号事件を「三百五十年前の日英海戦」と名付けているのは，鈴木の講演と同じ趣向であり，積み荷を奪おうとしたデイヴィスが返り討ちにあったとするのもおよそ10年間繰り返された筋書きだが，小野は「手足がバラバラに裂けて目もあてられぬ」状態になって全滅した倭寇の最後を省略することなく描く。もちろん，その後に同じマレー沖で英国戦艦が撃沈されたことに言及して，実に「水ぎわだったあだうち」ではないかと感心してみせるのであるが，小野が本書の序章を記したのが1943年9月ということは無視できないだろう。アッツ島守備隊が「玉砕」したと発表されてから数か月後のことだからである。大東亜の理想や必要性を強調する一方で，現下の「全世界をあげての大戦争には，日夜じつに多くの犠牲や消耗」が伴うことは，「日本少国民文庫」であっても触れざるを得なかったようだ。タイガー号を襲撃した豪胆な倭寇に英国人は圧倒され，「だれひとりとしていのちを惜しむ者はなかった」ことに感じ入ったというのも，戦局の中での「犠牲や消耗」の意義を強調しているように読める。ただ一人生き残った倭寇が，理由を問われて「お前たちをみなごろしにして，船をうばおうと思ったのだ。さあ，いいから，おれをめった切りにしてくれ」と言い放ったというのは，パーチャスの記録を参照してのことだろう（小野1944, 4, 214–216）。この場面で英国の海賊行為に対して，記録に残ら

33）なお本書には，徳富蘇峰が「拓開万里之波濤」という御宸翰に由来する題字を寄せている。

34）海軍だけでなく，陸軍報道班として従軍していた滝田憲次もタイガー号事件を日本の勝利として描いた詩を残している。後半のみ引用すれば「巨船タイガーに躍り込み／紫電は飛びぬ，日本刀／血煙あがり，銃みだれ／夕陽に紅き甲板も／しばし豪雨にどよむとき／艦長デビイス打ち取れり／南海荒す白人の／非道に抗し決然と／見あぐる空に十字星／八幡の旗は翻える」となっており，鈴木や永松らの宣伝の波及効果がうかがえる。滝田（1943, 170–171）を参照。

なかった声を想像し，雄弁に反問することも可能であっただろうが，再現されたのはより向こう見ずな態度の再認でしかなかった。アレクサンドロスに反駁した海賊の逸話の移入から始まる明治以来の倭寇再評価は，新村の望んだような「海賊」をついに描けず，無謀に討ち死にする姿を強調するしかなかったのである[35)]。

実際，同時期に和辻哲郎は倭寇の「無駄死」を指摘していた。1943年4月，海軍大学校での講演でのことである。その際に和辻はデイヴィスを襲撃してただ一人生き残った無名の倭寇ですら，武士同様に「全然命を惜しがらぬ態度」を示したと賞賛した。和辻は，Markhamが編集したデイヴィスの航海記（1880）からパーチャスの記録に基づきつつ，正確かつ臨場感たっぷりに突入劇を語っている。繰り返し注意されたにもかかわらず，デイヴィスは「日本人の謙遜な様子に欺かれて遂に武器を取り上げなかった」と巧みに伏線を張り，「かくして一日中英人は米の中をさがし，日本人はそれを眺めていた」とパーチャスからの翻訳を挟みこんで，「こういう英人の心構えが，日本人を真に鄭重に取扱ったものでなかったこと」は明白だと衝突がやむを得ないものという印象を与えている。「この油断の間に日本人はすっかり手筈を整えた」と述べて，講談のように襲撃を語り，陰惨な最後を活写した後，しかし彼らは「具体的な任務を自覚」できなかったことを強調した。そうして「無数の優れた武士たちが国内で互に殺し合い，国外では無駄死」した結果，「ヨーロッパ人よりも二三百年も立遅れることになった」と結論づけたのである（和辻1944, 10, 12–13）[36)]。大義と関連がなければ個人の犠牲が無駄に終わるとは，海軍批判とも取れるが，ここで注目したいのは，タイガー号事件から倭寇を半ば批判している点である。

和辻はその後『鎖国』（1950）で，倭寇をとりあげて，没交渉のヨーロッパと日本が同じ歴史を辿っていると指摘し，ノルマン人と比較した。和辻によれば，両者はともに「あぶれ者」であるが，ノルマン人は次第に国家に寄与するようになっていったところが異なるという。つまり，「海賊に過ぎなかった冒険的航海者も，その仕事が大きくなるに従って公共的な意義を獲得し，国家の支持を得てくる」のだが，倭寇にはそれがなく，文字通り，「侵略を受けた国々の記録によって知られる」だけで，母国に還元することなく消えてしまった。つまり「歴史的意義を獲得し得なかったということが倭寇の歴史的意義」だと要約したのであった（和辻1950, 292–295）。和辻は竹越や新村には言及していないが，倭寇とノルマン人を比較しつつ，公的な支援の有無が異なるという主張は，竹越の指摘そのものである。ただし和辻は，たとえ公的支援を受けなかったとしても，倭寇は公共性を獲得せず母国に還元するものもなかったと強調したのであった。冒頭のアレクサンドロスと海賊の逸話でいうなら，海賊が王になろうともしなかったといえるだろう。いみじくも『鎖国』の中では，タイガー号事件は触れられていない。

35）例外的に倭寇の内面の独白を描く佐藤虎男「ピンタンの星」（1940）があるが，復讐として正当化しているのみであり，これは南洋一郎「日本甲螺船」（1940）や陸直次郎「ピンタングの虹」（1942）と変わることがない。倭寇の口を通しての「王」への反駁はついになかったといってよいだろう。

36）なお和辻の講演から約1年後，海軍は神風特別攻撃隊を創設している（Hashimoto 2020, 86）。

こうして倭寇のタイガー号襲撃事件も，日本の帝国海軍の宣伝を最後にいわば「公共性」を失ったのである。

おわりに

これまで見てきたように，海賊同様，倭寇もまた公私や善悪の境界を問いかける存在であった。従来の「倭」と「寇」の境界や意味を再考する視点が19世紀末にもたらされたのは，英国の海軍と海賊像の移入と日本国内での帝国主義の進展もさることながら，アレクサンドロス大王に反論した海賊の逸話もその遠因になったと思しい。ピーター・パーレーの『万国史』や『パーシー逸話集』を通じて，海賊と海軍は規模の違いにすぎないというこの逸話は明治の初期から知られており，事実，倭寇の再評価にも援用された。ただし，海軍以上に海洋文化の移植は困難であり，それは志賀重昂が『日本風景論』で荒磯を評価しつつも，マードックの詩くらいしか引用できなかったところによく現れている。確かに倭寇があたかも万里の波濤を開拓したかのように誇張する言説は続いたが，倭寇の人気小説はほとんど生まれず，その貧困は新村出が繰り返し嘆く通りであった。そうしたなか，『大日本史料』とマードックの『日本史』で取り上げられたジョン・デイヴィス殺害事件（1605）は，日英双方で想像力を刺激した。倭寇が突入して全滅した陰惨な事件ではあるが，そこから海洋帝国日本の「過去」と「脅威」が日英の間で増幅されていったのである。竹越与三郎は，倭寇が東洋全体に植民地を持っていた過去を描き，英国の元海軍中将のバラードは，潜在的な日本の脅威を強調するために同様の歴史を仮想した。しかしバラードの一節は，日本で単純化されて要約され，さらに日本のナショナリズムを刺激することになる。こうして日英同盟が失効し，孤立した日本がますます帝国主義に傾いていく1932年，鈴木秀次海軍大佐が，タイガー号との衝突を日英海軍戦として再発見した。事件は海軍の宣伝に使われ，あたかも日本が勝利したかのように作り替えられていった。ただし，タイガー号との勝負けや倭寇の名称如何にかかわらず，その海賊たちが日本で物語として描かれたのは，名の知れた英国人を殺し，命を惜しまず全滅したからだけに過ぎない。倭寇の大義名分や海軍との連続性は十分に物語化されることはなく，したがって和辻哲郎が示唆したような公共性も得ることなく，倭寇といえばしばしば紹介されてきた同事件とその物語は，第二次世界大戦後，すっかり忘却されたのである。

参考文献

芦間圭「英海軍と互角に戦った日本海賊」『少年　倭寇と山田長政』（大同館書店，1934）
足立栗園「八幡船」，『東京経済雑誌』753（1894年11月24日）
五十公野清一「ボルネオ沖の日英人大合戦」『南海の勇者―海国史話』（金星堂，1941）

伊藤銀月『日本海賊史』（隆文館，1906）
稲賀繋美『絵画の臨界』（名古屋大学出版会，2013）
瓜生政和編著『智識初歩』上（明治学舎，1875）
小野俊一『大東亜ものがたり』（新潮社，1944）
川島元次郎『徳川初期の海外貿易家』（朝日新聞合資会社，1916）
木村毅『丸善外史』（丸善，1969）
後藤乾一『日本の南進と大東亜共栄圏』（めこん，2022）
沢村専太郎『日本絵画史の研究』（星野書店，1931）
志賀重昂『南洋時事』（丸善商社，1887）
志賀重昂『日本風景論』（政教社，1894）
志賀重昂『日本風景論』増訂5版（政教社，1895）
志賀重昂『日本風景論』増訂15版（政教社，1903）
志賀重昂『続世界山水図説』（富山房，1916）
実業之日本社編「日英の決戦と和睦」『南海雄飛記』（実業之日本社，1934）
新村出「倭寇時代の俗謡」『南蛮記』（東亜堂書房，1915）
鈴木秀次『大東亜戦ト伊予水軍』（村上藤三郎，1942）
関榮次『日英同盟』（学習研究社，2003）
高垣眸『龍神丸―海賊奇譚』（大日本雄辯會，1926）
滝田憲次『図南挺進軍―ガタルカナル・ブナの血戦』（天佑書房，1943）
竹越与三郎『日本経済史』第2巻（日本経済史編纂会，1920a）
竹越与三郎『日本経済史』第3巻（日本経済史編纂会，1920b）
竹越与三郎『倭寇記』（白揚社，1938）
田中健夫「前期倭寇の消長」『図説日本文化史大系』第7巻（小学館，1957）
田中健夫『中世海外交渉史の研究』（東京大学出版会，1959）
辻善之助『海外交通史話』（内外書籍，1930）
徳富猪一郎『近世日本国民史』第14巻　徳川幕府上期上巻改版（民友社，1924）
永松淺造「海戦実話 八幡船英艦を破る」，『海洋少年』3（7）（1941年7月）
永松淺造「八幡船，英艦を破る―三百年前の日英マレー沖海戦」『海ゆかば―皇国海戦史』（大果書房，1942a）
永松淺造「南進日本に魁した八幡船魂」『壮烈海国魂』（忠文館書店,1942b）
中村正直『西稗雑纂』第1集（同人社，1876）
中村真菜美「谷文晁筆「公余探勝図」の制作について」『フィロカリア』32（2015）
夏目金之助『文学論』『漱石全集』第14巻（岩波書店，1995）
ペートル・パーレー『万国史』上（文部省，1876）

萩原新生「日・英ボルネオ沖の海戦」『南海雄飛の人々』（皇国青年教育協会，1942）
長谷川正気『倭寇』（東京堂，1914）
橋本順光「ポカホンタス伝説としての山田長政物語―明治の小説から大映の映画まで」『タイ国日本研究国際シンポジウム論文報告書』（2014）
橋本順光・鈴木禎宏編著『欧州航路の文化誌―寄港地を読み解く』（青弓社，2017）
橋本順光「東洋人アメリカ発見説とその転生―日本の写しとしてのインカ帝国幻想」稲賀繁美編著『映しと移ろい―文化伝播の器と蝕変の実相』（花鳥社，2019）
樋畑雪湖「海運の消長と造船術」，雄山閣編『日本海軍史』（雄山閣，1934）
平川祐弘『漱石の師マードック先生』（講談社，1984）
平間洋一「日英同盟と第一次世界大戦」細谷千博・イアン・ニッシュ監修『日英交流史1600-2000 3軍事』（東京大学出版会，2001）
増野恵子「志賀重昂『日本風景論』挿図に関する報告」『非文字資料から人類文化へ―研究参画者論文集』（2008）
三上正毅「日本の政史に及ぼせる海の影響」『日本読書協会会報』19（1922年3月）
村田四郎『八幡船史』（草臥房，1943）
矢野暢『「南進」の系譜』（中央公論社，1975）
山縣五十雄「日本の史家マードック―其一生と其事業」『太陽』第32巻（1926）
山本敦彦・上田誉志美『風景の成立―志賀重昂と『日本風景論』』（海風社，1997）
和辻哲郎『日本の臣道・アメリカの国民性』（筑摩書房，1944）
和辻哲郎『鎖国―日本の悲劇』（筑摩書房，1950）
George A. Ballard, *The Influence of the Sea on the Political History of Japan*（London: Murray, 1921）
The Encyclopaedia Britannica, vol.2（Cambridge: University Press, 1910）
Masako Gavin, *Shiga Shigetaka, 1863–1927*（Richmond: Curzon, 2001）
W. E. Griffis, *Corea: The Hermit Nation*（New York: Charles Scribner's Sons, 1911）.
Ian Hamill, *The Strategic Illusion: The Singapore Strategy and the Defence of Australia and New Zealand, 1919–1942*（Singapore: Singapore University Press, 1981）
Yorimitsu Hashimoto, "On the Marine Road: Anglo Japanese Encounters and Exchanges in Modern Maritime Culture"『異文化へのあこがれ：国際海洋都市 平戸とマカオを舞台に』（2020）
Richard Hildreth, *Japan as it was and is*（Boston: Phillips, Sampson, 1855）
Adrian Johns, *Piracy: The Intellectual Property Wars from Gutenberg to Gates*（Chicago: University of Chicago Press, 2010）
Margarette Lincoln, *British Pirates and Society, 1680–1730*（London: Routledge, 2016）

Arthur Lloyd, *Kenshin's Vision: A Poem of Japan*（Tokyo: Maruya, 1894）

Neville Meaney, *Australia and World Crisis, 1914–1923*（Sydney: Sydney University Press, 2009）

A. Miall［James Murdoch］（ed.）, *Don Juan's Grandson in Japan*（Tokyo: Hakubunsha, 1890）

James Murdoch, *A History of Japan*（Yokohama: Kelly & Walsh, 1903）

Nonassimilability of Japanese in Hawaii and the United States（Washington: Government Printing Office, 1922）.

Peter Parley, *Universal History*, 8th ed.（London: William Tegg, 1862）

Peter Parley's Universal History, New ed.（Maruya, 1881）

"Pirate's Defence", *The Percy Anecdotes*, Revised Edition, vol.1（New York, Harper & Brothers, 1850）

Reuben Percy, "Hogarth,", *The Percy Anecdotes*（London: Frederick Warne, 1870）

Sholto and Reuben Percy, "Pirate's Defence", *The Percy Anecdote, Anecdotes of Eloquence*（London: T. Boys, 1820）

Samuel Purchas, *Hakluytus Posthumus, or Purchas his Pilgrimes*, vol.2（Glasgow: J. Maclehose, 1905）.

Nathaniel Wanley, *The Wonders of the Little World; or A General History of Man,* vol.1（London: W. J. and J. Richardson, 1806）

James E. G. Zetzel（ed.）, *Cicero, On the Commonwealth and On the Laws*（Cambridge: Cambridge University Press, 2017）